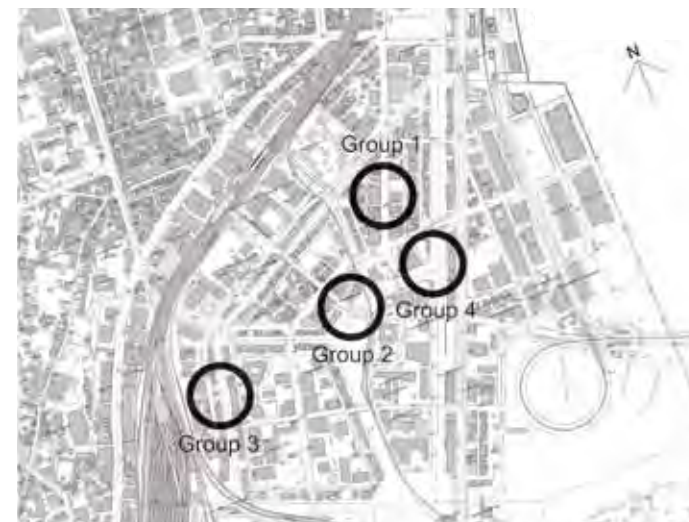


街を歩き、街を知ることから始まる都市デザイン 歴史から未来を構想する手法を学ぶ

東京湾岸地区の街区と公共空間調査 研究室全体で ひとつの課題に取り組む

都市デザインを学ぶなかで、その街の歴史と形態を知ること力を入れている前田研究室が、2014年に研究室をあげてプロジェクトとして取り上げたのが「東京湾岸地区の街区と公共空間調査」である。東京都港区のなかでも、湾岸に位置する芝浦・海岸地区は、明治から昭和の初期にかけて東京湾を埋め立ててつくられた地域で、かつて物流の要だった運河が縦横に走る。JR田町駅の東側にあたり、芝浦工業大学芝浦キャンパスもこのエリアにある。学生にとっても馴染み深いこの芝浦地区を題材に、都市の歴史と変遷を調査。ここには約150の街区（道路に囲まれた区画）があり、そのひとつひとつにどんな建物が建っているか、かつてはどのような様子だったのかをつぶさに調べた。高度経済成長期に整備された首都高速道路やモノレールなどの流通網と、倉庫や工場、それに伴い発達した商店街など、さまざまな顔が混在する。最近では、そうした倉庫や工場の跡地の再開発でできたオフィスや高層マンションが林立する。学生はチームごとに実際に街を歩き、肌で街の様子を体感しつつ、キャンパスに戻って街のありかたについて考察を深めた



調査をもとに作成した、芝浦地区の現在の様子が見える地図と1000分の1の模型。都市計画規制、高さ、隣接条件、建物用途、建物配置、空地と動線の6項目について地図上で分類し、考察していった。かつての街との時代ごとの変遷などを見て行くと、さまざまな角度から街の性質がわかってくる。この調査研究をベースにした「国際建築・空間ワークショップ」では、韓国中央大学の学生と4人一組で4つのチームをつくり、それぞれがエリアを選び（地図中の4カ所）、街に対して新しい提案をつくることを課題にした



「国際交流建築・空間ワークショップ」の2014年の成果は、「芝浦運河再考」と題した一冊にまとめた

地方の大学、とりわけ理工系の学部はなぜか山の中にあることが多い。最寄りの鉄道の駅からバスに乗り、山の上のキャンパスまで何度出かけたことだろう。だから芝浦工業大学芝浦キャンパスのような、街なかの大学に足を運ぶのは久しぶりのことだ。JR山手線の田町駅から徒歩3分。オフィスや商業ビルが林立する繁華街のなかに校舎がある。

芝浦という地名が示すように、そこは「浦」、すなわち水辺に近い。東京都港区の芝浦地区は、明治時代から昭和にかけて海を埋め立ててつくられた地域で、大学のすぐ近くには運河が流れ、その先には東京湾が広がる。都市デザインを研究の軸

にする前田英寿研究室にとって、この街はまさに生きた教材である。

前田教授はこれまで、建築設計と都市計画を両輪にして、先進的な街をつくる現場に数多く携わってきた。例えば千葉県柏市にある「柏の葉アーバンデザインセンター」もそのひとつ。市民が行政や企業、大学と連携して街をつくっていくための拠点であり、情報発信の場である。前田教授は、同センターに初動期からかわり、副センター長もつとめた。「ハードとソフトの両方がある、はじめて街は生きたものになる。ひとつひとつの建物の設計技術だけがあっても、全体が見えていな



田町駅から徒歩3分。オフィスビルや商店が入る複合ビルなどが混在する通りのなかに、芝浦工業大学もある

ければ意味がない」という。

いま都市は、工場跡地をどう活用するか、あるいは再開発をどう進めるかなど、さまざまな課題を抱える。研究室を卒業した学生たちの多くは、ゼネコンやハウスメーカーなどの民間企業や、公務員として行政機関に就職する。直接、大規模な都市デザインに関わる機会はずいぶん訪れないかもしれないが、「建築単体の設計の現場でも、環境とあわせて計画する能力が益々必要になる。規模の大小に関わらず、街並やオープンスペースをどうつくるかといったことを考えるとき、研究室で学んだことは必ず役にたつ」と前田教授は考えている。

いかにして都市デザインの視点と実践の方法を学生たちに伝えていくか、を念頭に教育・研究に取り組んでいる。

街区は変わらなくても用途が変わる

なかでも前田教授が大事にしているのは、フィールドワークを通して、都市の歴史と形態を知ることである。歴史ある街は、なぜ何百年もその魅力を保っているのか。どんな街にも歴史がある。その歴史を探ることは、現在ある街の姿は決して一夜にして成ったわけではないことを知り、未来の都市デザインを考える有効な道しるべになる。

芝浦アーバン・デザインスクール 港区指定文化財「旧協働会館」

芝浦にあるかつての「見番」(旧協働会館)は1936(昭和11)年に竣工した、近代和風建築を知る貴重な資料である。在来軸組工法の木造2階建て(屋根の部分はトラス構造)で、唐破風の玄関を入るとタイル敷きの玄関ホールがある。2階には70畳の大広間と約30畳分の舞台がトラス構造の屋根に支えられ、柱のない大空間でつくられている。2009年に港区の有形文化財に指定され、現在は写真のように保護用のネットがかけられて修復を待つ状態。まわりはビルや駐車場になり、かつて界隈が花街だった面影を見つけるのは難しいが、それだけにこの場所が残っていることは意味がある。修復後の用途はいまところ未定だが、どのように活用していくといいかという提案を、港区の協力のもと、3年生の設計演習として行った



詳細な構造模型を作成

研究の内容と提案はそれぞれ、地元のイベントと学内のギャラリースペースでも展示。一般の人たちにも公開する機会となった



港区や地元と連携して、2013年14年に研究室が取り組んだのは「東京湾岸地区の街区と公共空間調査」というプロジェクトだ。

湾岸地区のなかでも、まさに大学のお膝元である港区芝浦地区を題材にしてフィールドワークを行い、ひとつひとつの街区を調査、分析。埋め立ての歴史をつぶさに調べた。地図だけでなく1000分の1の模型をつくり、街区の形によって建物の形が変わっていることなどがひと目でわかるようにした。

こうした調査から、街区は昔も今も変わらないが、時代によって建物が変わり、建物が同じでも用途が変わっているなどの変遷がみてとれる。また芝浦地区は、橋で外の地域とつながってきたために再開発が遅れたことなどがわかってくる。そのために、店もあり工場もあり住居もある「アーバンビレッジ」と呼ばれる街が、今日まで形成されていることを学生たちは実感として持つことができるようになる。見慣れた街の姿を多角的に捉えることができるようになるのだ。

教育・研究を社会に開く

この研究プロジェクトは、大学が取り組んでいる「芝浦アーバンデザイン・スクール」の一環でもある。地域と大学が連携して学生を育てることを目的として、2013年度から始まった。1. 教育 [地域の建築から学ぶ設計演習]、2. 研究 [建築を通して都市を捉える]、3. 社会貢献 [都市と地域に開かれた場] という三本柱で、建築、都市、地域の未来を探るといった試みで、前田研究室だけでなく、デザイン工学部デザイン工学科建築・空間デザイン

領域全体で進めている。文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」と、大学が推進する「まちづくり」「ものづくり」を通じた人材育成推進事業が母体になった活動だ。

前述の街区調査と連動しながら、2013年度14年度に3年生の設計演習として行ったのは、港区指定文化財の「旧協働会館」の調査と、その使い方の提案である。「旧協働会館」は、戦前は「見番」と呼ばれた歓楽街の組合事務所だった建物で、芝浦一丁目界隈が、かつて花街として賑わった時代をいまに伝える知る貴重な建造物だ。

2000年に老朽化のため閉鎖され、2009年に港区の文化財に指定されて以降、現在は修復の準備をしているところ。港区と意見交換する中で、演習に取り上げることになった。模型を作成するなどして現状を把握したうえで、コンバージョン(用途変更)プランをそれぞれ学生たちが考え、提案。これら研究成果は、芝浦の街区調査とともに、地元のイベントや、大学のホールでも展示した。また、一般区民も参加する公開講座も開くなどして、大学と地域が共に学ぶ場も設けている。

前田教授は「柏の葉アーバンデザインセンターで取り組んできたことを、私学の現場でもできないかという思いがある」という。公・民・学が連携してに教育・研究・社会貢献を進めるといった手法を意識的に取り入れているのも、こうした思いと経験が前田教授の背景にあるからだ。

2015年度は世田谷区と共同で、区の約50の公共建築を調査、基礎データをつくる作業に研究室全員で取り組む。80年代から90年代にかけて、世田谷区は全国的にもレベルの高い公共建築の整備を行ってきた。住民の高齢化などに伴いその在り方も変わり、デザインの点検が必要な時期を迎えているという。学生は、それぞれ受け持ちの施設を決めて、現状を把握することから始めている。「これから公共建築をどうしていくかは大きな課題であり、リノベーションやモデルは市場としても大きくなっていく。そのときに、どうしたらしっかりした技術をもってマネージメントができるかを、学生や地域社会にも伝えていきたい」と前田教授は考えている。

国際交流建築・空間デザインワークショップ ソウル都心の再生



2012年から芝浦工大デザイン工学科建築・空間デザイン領域の篠崎教授と前田教授が中心になって、韓国の中央大学のJung Hyung Lee教授と一緒にいるワークショップは、舞台を世界の都市に移して、都市デザインを学ぶ。初年度は、新旧の街の顔を持つ韓国のソウルのなかでも、旧市街にスポットをあて、路地や大通り、市場などを題材にしてフィールドワークを行い、さらにそこから新しい街の提案を行った。12頁で紹介した「芝浦運河再考」の前段となるワークショップである。このときも研究の成果は、「乙支路修築」と題した冊子にまとめた(下)

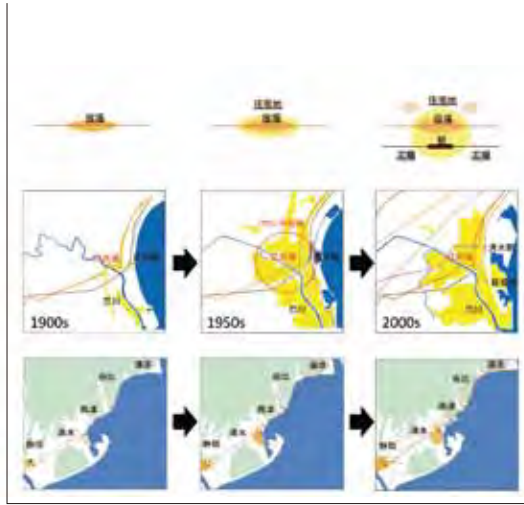


前田研究室に張られている2012年と2014年のワークショップを報告するポスター



卒業研究・大学院研究 論文、設計どちらも 土地を読むことから

「城下町土浦の都市再生」(設計)や「長野県の近代都市形成」(論文)、「水郷都市の保全再生計画」(設計)など、前田研究室の卒業研究・大学院研究は、いずれも具体的な都市を題材にしたものが多い。それまでの研究課題で取り組んできた手法を、いかんなく発揮することができるかといえよう。またそれが、自分のふるさとであるケースも少なくない。体験的に知っている街を、もう一度発見するよい機会になる。「ふるさとの街を研究対象にすると、調査のために里帰りする回数が増えるので、親御さんからは間違いない喜ばれます(笑)」と前田教授。もちろんふるさと編だけでなく、それまで訪れたことのある場所を題材に研究したり、新たな提案を試みる設計に挑む者もいる。設計と論文の割合は「半々くらい」という



「宿場町の近代都市形成 静岡県東海道22宿」
2013年の卒業論文から。東海道の53ある宿場町のうち、22宿は現在の静岡県にある。それぞれの、明治、昭和、平成の地図を用いてこの22の宿場の、変遷を調べ、近代化のなかで宿場町がどう変化してきたのかを、静岡県出身の学生が調査した



「その場所にしか生まれない商業空間」
2014年の卒業設計から。東京の渋谷駅と原宿駅の間にある神宮通り公園を対象の敷地として、公園の可能性を広げる新たな場を提案した

デザイン工学科建築・空間デザイン領域の各研究室が合同で、毎年つくっているイヤーブック。その年の課題やそれに対する発表内容、卒業研究や修士論文のレジメなども掲載



「都市のサードプレイス」
2012年の卒業設計から。住居と職場や学校の間であって、より自由な場として誰もが共有できるサードプレイスについての研究と提案から、都市の豊かさを考える。北品川地区を例にとりながら、新旧の場をつなぐ空間の設計を行った

ローカルとグローバルの視点

こうした身近な地域をつぶさに知ることと同時に、芝浦工業大学はグローバルな視点を持つための教育にも力を入れている。文部科学省が「スーパーグローバル大学創成支援」事業の対象として2014年9月に選定した大学37校のうち、同校は私学の理工系大学で唯一選ばれた。

そもそもスーパーグローバル大学創成支援事業とは何か。「世界レベルの教育研究を行うトップ大学や、先導的試行に挑戦し我が国の大学の国際化を牽引する大学など、徹底した国際化と大学改革を断行する大学を重点支援する」事業で、公募によって申請を受けた大学のなかから、専門家の意見をもとに日本の未来を託せるスーパーグローバルな大学を選定し、以後10年間、教育・研究に対して支援を行うというもの。

こうした支援対象に選ばれる以前から、前田教授の所属するデザイン工学科建築・空間デザイン領域は、「国際交流建築・空間デザインワーク

ショップ」を行ってきた。

韓国の中央大学校と連携して、2012年はソウル、14年は東京を題材に、双方の学生たちが混成チームをつくり、現地に出向いて調査研究を行ってきた。15年はマレーシアのジョホールバルを予定している。前述の芝浦地区の調査も、このワークショップと関連づけて、フィールドワークを通して課題を見つけ新しい都市像の提案をする。

こうした経験を通して、都市デザインに向き合う訓練を積んだ集大成が、卒業論文・卒業設計そして大学院での研究である。

前田研究室では、建築と街並をテーマにビルや再開発の計画設計をするケースもあれば、都市の歴史と形態を題材に、城下町や宿場町の近代化の過程を論文としてまとめる学生もいる。ほかにも鉄道の駅舎や河川などの公共空間とインフラについてや、観光や震災復興を通して地域の保全と再生を考えるなどが大きなテーマで、それぞれの具体的な題材や手法を、学生たちは前田教授の指導

のもとに導き出して行く。

論文であれ設計であれ、「これからの時代は建築を建てる、設計するだけの仕事はあきらかに減っていく。それだけに社会に出たときに、自ら仕事を提案する力が求められる。都市デザインという研究に取り組むことで、現状を把握し、自分で課題を設定する手法を身につけていって欲しい」と前田教授は語る。



前田 英寿
Hidetoshi Maeda

一級建築士。博士(工学)。技術士(建設)。静岡県生まれ。89年東京大学工学部都市工学科卒業。94年同大学大学院博士課程退学。曾根幸一・環境設計研究所。2001年プレイス・デザイン代表。07年柏の葉アーバンデザインセンター副センター長。10年より現職。世田谷区風景づくり委員会・委員長

前田研究室はグッドチョイス 都市を学ぶ面白さから、独自の研究テーマを導き出す



研究室にて。今年の研究課題である、世田谷区の公共施設の模型づくりの手をとめて撮影

現在、前田研究室には16名の学生が在籍する。4年生が13名、大学院生が1名、留学生が2名。異口同音に「都市について楽しそうに語る先生の授業に魅力を感じて」前田研究室の門を叩いたと語る。「親身に指導してくれる面倒見のよさ」も人気の理由。卒業に向けて取り組んでいる研究内容も、視点がそれぞれ面白い。

「温泉地を中心にした日本の入浴文化の研究」に取り組む松永謙太さん(4年)は、「東京オリンピックに向けて、外国の人たちに日本の文化を紹介したい」と思い、このテーマに取り組ん

でいる。「フレンドリーに学生に語りかける先生も多いなか、学生と先生のけじめをきちんとつけている」のも前田教授の魅力だと語る。住宅全般に関わる仕事に就きたいと考えて、就職活動中。

福島望さん(4年)は「街の雰囲気よくなるような、足し算のアイデアを提案できる街のリノベーション」を研究。いまは街歩きをしながら材料を集めている。「まだ行ったことはないけれど、長野県の小布施町は授業で聞いてとても魅力的」と語る。住まいからまちづくりまで幅広く空間や建築に携われる企業に就職希望。

河合美咲さん(4年)は、前田教授の授業で「部屋のなかから開口部を額縁とらえて日本庭園を見る」話に興味を持ったことから、「路地の魅力分析」をテーマにする。「日本庭園は西洋の庭園と違い、細い道を歩かせるところに魅力のひとつがあり、それと路地には共通点があるのではないか」という視点で研究をしている。建築やまちづくりに企画段階から関わられる仕事に就きたいと考えている。

大学院に進学予定の小野寺菜さん(4年)は、「仮設住宅のコミュニティを促進させるための仕掛けや仕組みづくり」について研究。復興住宅の孤独死に関心を寄せたことがきっかけだった。「これから岩手県の被災地でヒアリングなどを行っていく予定。大学院でも引き続き研究を続けたい」と語る。

フランスのバリの大学から、昨年9月に留学生としてやってきたマリア・パヴィシッチさんは「東京の山手線と周辺の市街地の関係」について研究。パリに帰ってから論文として仕上げる。通っているバリの大学が芝浦工大と交流があったこと、アジアに興味があったことから留学を決めた。「パリでは建築学科に学んでいるが、研究テーマとしては都市に興味がある。都市の構造を学ぶ場所は少ないので、前田研究室に来たことはグッドチョイスでした」と笑顔で話す。



松永謙太さん



福島望さん



河合美咲さん



小野寺菜さん



Marija.Pavisicさん